

純潔と寛容の願

海願

本多弘之

honda hiroyuki

『大無量寿経』が語る法蔵願心の「永劫ようこくの修行」ということを、親鸞はたんなる物語とせず、私たちの心に起こる大いなる転換の意味と見た。すなわち、この法蔵菩薩の永劫の苦勞を背景にして初めて、罪業深く、愚鈍なる身に真実なる心が起こりうるのだと納得したのである。

煩惱に常に蔽おほわれている人間の意識に、純粹な心が起こることはない。起こるといいたくても、事実として自分の意識に純粹無漏じゆいむろうの

心は発おこらない。その自覚を「罪惡深重、煩惱熾盛しじやうの衆生しゆじやう」という。そういう凡夫の心に、「真実信心」を成り立たせることを、時間的に表現して「兆載永劫ちやうざいの修行」によるという有限の時間では突破できない煩惱の衆生なのである。絶対に消えない煩惱の大海を、くぐり抜けるものを獲得できるなどとは、人間理性の納得できる範囲のことではない。けれども、これを成就しようという決心を、「大悲の願心」と語りかけているのだ、と信ずるわけ

である。

実はこの構造は、仏陀の智慧の眼から見れば、本来「一如いちにょ」なる事実を与えられながら、それを見失い、その本来性に背いていることを自覚できずに、妄念もうげんの意識を「事実」だと思っているのが、苦悩の衆生だということなのである。「一如」という如来の智慧から見た存在の事実はその意味で虚妄こもの衆生を転換したことに於いて、「真実」だということである。真実と虚偽とは、普通には同時には成

立しない。しかし、この如来の智見にあつては、重層的に同時である。智慧からするなら真如しんじゆを与えられているのに、凡夫の惑まよいの意識にはそれが見えない、という構造である。

この如来の智慧と衆生の惑心との構造を、衆生の側から破ることはできないと自覚して、しかも大悲は、必ずこの構造を突破させたいと呼んでいる。その構造に耐えつつ願心を持続する主体を、「法蔵菩薩」と語るのだというのである。だから、親鸞はこの法蔵菩薩の誕生を「一如宝海ほうかいよりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまいて」(『二念多念文意』)と開明するのである。『教行信証』にも「弥陀如来は如より来生らいじやうして、報・応・化種種の身を示し現ひまわしたまうなり」(「証卷」と言われている。

この親鸞の開示を、さらに自己にとつての具体的な意味としようとしたのが、曾我量深師の「法蔵菩薩は阿頼耶識あらいやしきなり」の宣言なのである。「阿頼耶識」とは、唯識ゆいしき教学が押さえた深層意識の自己(ego)である。「アーラヤ」とは「蔵」という意味だという。「蔵」にあらゆるものを蓄えるように、あらゆる経験くんげんを熏習くんじやうして、保持し、持続する作用を阿頼耶識と名づけると言われる。普通は、迷妄の経験くんげんしかしてないから、阿頼耶識あらいやしきそれ自体には、煩惱の種子しゆじ(可能性)しか蓄えられてはいない、と言いいうる。にもかかわらず、宗教

経験(純粹清浄なる経験)が起おこることがあるのは、どうしてか。それには、先にすでに経験くんげんしたというのではなく、本来清浄の種子しゆじが隠れて保持されていた(本有種子ほんゆしゆじ)、と考かんえるか、あるいは、清浄なる経験を表現する教法の言葉ことばを聞くところに、清浄なる経験の可能性が育てられるのだ(新熏種子しんくんしゆじ)、と考かんえるかのいずれかであろう。

ところが、玄奘げんじやう三蔵が翻訳した『成唯識論』の中心の思想家たる護法菩薩は、この宗教経験の可能性をこの二者択一の説に立たず、両論並立の説を立てた。つまり、先験的・経験的のいずれかなのではなく、経験していくところに可能性が現れるのだというわけである。

特に宗教経験とは、先の仏教的認識からするなら、本来の存在(仏陀から見た存在のあり方)は、凡夫の経験からは無いとしか言えないことだが、しかし事實は、本来と別の存在しんぞんを生きているのではない。つまり、如来の智見からするなら、一切の衆生は如来の智慧の内にある。衆生はそれを知らずに外にいてるのである。だから聞熏習もんくんじやうによつて、本来を自覚させられることが、可能となるというのである(だから『成唯識論』では、清浄なる法界ほふかいの経験の種子は、阿頼耶識が蔵するのではなく、阿頼耶識に「依附いぶ」しているという)。法蔵願心は、本来の一如を自覚させるべく、衆生のなかに無倦むげんにはたらいっている。それを

浄法界の種子を熏習しているのだとうなずくなら、無明むみやうの闇を苦惱くなんしつつ歩み続ける阿頼耶識は、実は法蔵願心だったという自覚にもなるのである。

日常経験の延長にあることではなく、大いなる転換をくぐつて、本来、可能性があつたことがわかるといふのである。「法蔵菩薩の誕生」とは、「法蔵菩薩がわれとなる」ということだ、と曾我量深師は感受した。それは、阿頼耶識の本来性こそ法蔵願心と教えられていることと対応し、無明の闇に深く自己を没めしつつこれを転換するはたらきなのだということではなからうか。

法蔵精神にとつて、煩惱の衆生は自己の内なる「他」である。この他なる衆生を、限りなく「利他」のはたらきに摂とり尽くそうとして、自己を他それ自身にまで同化して、煩惱の衆生の主体となるのだというのである。親鸞は、こういうはたらきを「願海」というメタファーで語っている。あらゆる不純粹性を呑み尽くして、その濁りを転じて一味いみの海の潮うしほとするというのである。大悲には、障しょう碍がいなる何ものもないということなのである。

(ほんだ ひろゆき 親鸞仏教センター所長)